

新世界の月

シコウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VOICEEROIDと日本国召喚のクロス、新世界でわちやわちやするゆかりさんが見たかった。

目次

第一章・接触編

新しき世界	1
星の裏側からの使者	5
会議そして待機	9
ある提督の苦悩	13
もう一つのファーストコンタクト	16
砲艦外交	21

第二章・河都日常編

日本情報軍	24
新世界の星	29
留守番	32

『帝国』大西海総督府

地球の亡霊	40
現地協力者	45
アリアルさんの大冒険	52
実演販売	57
4人目	65
亡国の罪人	70
日本情報軍活動録	file. 201
6パーパルディア	75
設定資料と備忘録	
登場人物	83
登場国家と組織、用語	89

第一章・接触編

新しき世界

初夏のこの時期にしては暑い陽射しを全身に浴び、長い航海などなかったかのように純白の船体を陽光に輝かせる大型客船、その最上甲板で薄いグレーの夏用制服を着た青年が客船を囲む小型船を楽しげに眺めていた。その彼の肩の階級章は日本情報軍の少尉であることを示している。

日本情報軍：最後の戦争の後、改称された旧陸、海、空自衛隊とは起源を異にする組織のとある部隊に彼は籍を置いていた。

「守るつもく攻むるつもく黒鉄のく鋼のしーろの：」

「少尉^{マスター}、アレは軍艦ではありません。」

後ろから、160年ほど昔の歌を口ずさむ彼に声を掛けたのは、彼と同じ制服姿の女性下士官。

「でもゆかりさん、アレはどう見ても戦艦だよ？」

振り向いた少尉の目線の先には、灰色の重厚かつスマートなステルス性を意識した艦体に、三連装砲塔をはじめとする多彩な武装を載せた巨艦、

「海軍に怒られますよ、正しくは『やまと型火力投射護衛艦』二番艦『むさし』です。」
『むさし』は第二次世界大戦後、日本が保有する戦艦としては2隻目、建造する戦艦としては初の艦だった。

「それよりも少尉、^{マスター}『いず』から荷物を開封するか、連絡がきていますよ。」
「えっ、本当だ。メールじゃなくて電話くれればいいのに。」

何も無い空中に指を滑らせる姿は、ほんの十数年前までは、滑稽に見えただろう。しかし、ARコンタクトレンズの普及した現代においてはありふれた光景だ。

「着信履歴が溜まっています。これ忘れたでしょう、ちゃんと身につけて下さい。」

ゆかりが差し出した軍仕様の複合インカムを耳にはめた少尉は、『むさし』と共に停泊している、空母寄りの外見を持つ輸送艦^{揚陸}『いず』に連絡を入れた。

「…ええ、ファーストコンタクトはうまく行ったようで、陸戦隊は今のところいりません。囲まれている？まあ当然でしょう。こんなところに突然現れちゃあ、ええ、それでは失礼します。」

『いず』との通信を終えた少尉は一つ背伸びをして、

「ボクの部下を荷物扱いとはひどいな、どう思うゆかりさん？」

「彼らは58式自律化戦闘人形…兵器であり備品です。あなたたち人間とは異なります。」

彼女が『自分たち』ではなく『あなたたち』と区切ったのには訳がある。

「君も人間じゃないか、ちゃんと政府から人権と戸籍も付与されている。」

「法的には、そうですが…私はあくまでもVOICEROIDのアミュレット仕様、戦術指揮支援AIです。少尉^{マスター}たち自然種の間人ではありません。」

十数年前、AIに関する技術革新を迎えた人類は新たな知的生命体を生み出した。

『VOICEROID』と名付けられた彼女たちは高度な思考を可能とし、ついには『魂』を獲得して人権を付与されるに至った。

「お硬いねえ…、『魂』を獲たらもう人類さ、この多種族世界でそんな区分は意味がないよ。それとその『マスター』呼びどころにかならない？ボクは、上官だけどご主人様じゃない。」

「パートナーをマスターと呼ぶのは、我々VOICEROIDに染み付いた習慣のよななものです。今さら変えられません。でもどうしてもと言うなら階級で呼びましょうか？」

「いや、いい。パートナーか…そう認めてもらえるのは嬉しいね。」

万年人材不足の国防軍にも導入された彼女、VOICEROIDシリーズ『結月ゆかり』は生身の人間である少尉と共に自我を持たぬ自律化^ド戦闘^ロ人形^ドの分隊指揮の任についている。

部隊の実質的な指揮はアミュレット下士官が握り、自然種の将校がそれを監督、助言する。2060年代の日本国防軍では、一部の特殊部隊などを除き、このゆかりと少尉のような組み合わせが一般的だ。

——未だAIを信頼できない人類の恐れと見るか、人類の戦争への責任感の表れと見るか、判断がつきにくいところだね。

少尉は日頃このようなことを考えていた。

「当たり前でしょう。：おや、東から大型艦が4隻接近中、おそらく増援でしょうね。」
「どれどれ、どこだ？ いたぞ、えーとたぶん100門級と80門級か竜母はなし、と。」
ARRレンズの望遠機能を使わず、古式奥ゆかしい双眼鏡を覗くと、風を帆一杯に受けこちらへ向かってくる船、地球ではとつくに廃れたはずの艦種：戦列艦が目映った。

星の裏側からの使者

双眼鏡を下ろした少尉は、海軍の戦術ネットワークとゆかりを通した『むさし』の偵察ドローンからの映像に見入っていた。

「押っ取り刀で駆けてきたか、やつぱり80門級と100門級だ。風神の涙もあるな…魔導戦列艦か、装甲はどうかな？ ゆかりさん船体のスキャンデータある？」

快速の80門級を先頭に見事な単縦陣を組み、ゆつくりとしかし彼ら基準では全速力で進む艦隊を、軍艦好きの血が騒いだのか少尉は若干興奮気味に評した。

「映像のみです、他国の艦艇を無許可で走査する^{スキャン}ことは挑発行為と取られかねません。磁気及び魔力探査は…『むさし』のシステムが解析中です。」

算盤の珠にも似た髪留めの縁を、虹の七色に光らせつつゆかりは応えた。

「さて、中で待ちませんか？ お客さんも帰るようですよ。」

客船を離れるボートを見下ろし、そう続けた彼女に少尉は同意の返事をして、二人は船内へ戻って行った。

時代遅れの船に興味を示すことはあっても、驚くようなことはこの二人を含めて今の日本人には無い。遡ること4、50年ほど前、2015年に他の惑星、異世界への国家

転移という未曾有の事態に見舞われた日本は激動の時代を迎えた。

グローバル時代に突然、地球世界と切り離された日本。貿易や情報ネットワークが切断されたことによる国内の混乱、魔法という未知の技術、手探りのなか行われた新世界国家との外交、友好国となった国も多かったが、紛争、戦争も多く経験した。

辺境の無名の新興国の扱いをうけ、『ワイバーンを知らぬ蛮族』と門前払いされ、『列強と対等の立場を求める無礼者』と国民を虐殺され、『下した国を植民地とせぬ弱国』と侮られ、『魔力なしの劣等文明』の烙印を押され、…幾多の困難と紛争を乗り越えた頃には国家方針はすっかり変わっていた。

国際社会への積極的な介入、魔導文明の取り入れ、国際秩序の構築を目的とした^{World Union}世界連合の結成、新世界の警察官としての出発、そして手に入れた^{日本}パクス・ジャポニカ^{平和}の時代。

国民は訪れた新時代を謳歌するが、政府と日本国防軍には恐れるものがただ一つあった。

その名は『ラヴァーナル帝国』、『古^{いにしへ}の魔法帝国』とも呼ばれるこの存在は、かつて神話の時代に地球よりも遙かに広大な惑星全土を支配していたという。

この世界各地に共通する神話には、ヒトの上位種たる光翼人で構成され、他種族を迫害しさらにはコア^核魔法^{兵器}まで用いたとされている。

神話の続きには、神へ弓引いた挙げ句報復の隕石を逃れるため、大陸ごと未来へ転移したと伝えられている。

日本及び各国政府は、その去り際遺した『復活の刻来たりし時、世界は再び我らにひれ伏す』の石板を恐れ、世界に散らばるラヴアーナルの遺跡や遺物を発掘、調査している。

既知世界の国々と粗方国交を結び、地盤を整えた日本は、さらなるラヴアーナルの調査と失われた経済の発展、市場の拡大のため未知の世界：惑星の裏側の文明との接触を求めた。

接触について、先の悲劇を繰り返すまいと痛感した政府は侮られることがないように、平和のための抑止力として、覇権主義へと転じる危険も承知で軍拡へと踏み切った。

「…結果、国民は納得し政府は『平和的な砲艦外交』へと舵を切り、海軍は『やまと型』を保有した。『汝平和を欲さば、戦への備えをせよ』さて、この国はどう出るかな？ ゆかりさん。」

少尉はぬるくなつたお茶を飲み干し、窓の外の『むさし』を一瞥すると、国防軍制式弾の名前の由来となつた格言を引用し締めくくった。

「少尉、今までの敵対国はどれも指導者層が無能というわけではありませんでした。ただ、判断材料が上手く伝わらなかつただけとも言えます。情報は上に行くほど簡素化

され、都合のいいように解釈される。」

ゆかりは自分用のコーヒーを淹れつつ、情報軍のサーバに保管されていた調査記録を、自身のメモリから思い出した。

「ならば、初めから指導者層に力を見せれば良い。そのために偵察衛星で首都と思しき場所を特定し、『むさし』を引き連れてきた。違いますか？パガンダ王国やレイフォリアの再現は避けたいものです、この国の指導部が賢明なことを祈りましょう。」

かつて『むさし』の姉に焼き払われた2カ国は、世界に戦乱をもたらした愚か者として歴史に記録されている。

「そうだね。彼らの出番が無いことを祈るよ。さて、今日のおやつは何にしようか？」二人の目線の先の壁面モニターには、衛星写真と簡易測量による海図そして、ここからは目視外となる海域に待機する航空護衛隊群空母機動部隊を示す光点があった。

『船内連絡を申し上げます。交渉団関係者の方はシアタールームへ集合願います。緑り返します…』

「話がまとまっただみたいだね。さて、行こうか。」

棚から煎餅を取り出しかけた手を止め、恨めしそうに天井のスピーカーを見上げると二人は渋々ながら準備を始めた。

会議そして待機

既知世界の東辺、第三文明圏のさらにはるか東、未知の国の首都沖合…、政府交渉団の乗る大型客船の船内、通常ならば講演会場ともなるシアタールームではミーティングが行われていた。

例の通り前方に上位者、後方に下位者の席次となっているなか、少尉とゆかりは列の中ほどに座っている。

ファーストコンタクトで得られた情報の共有、今後の方針が外務省精鋭を中心に練られていく。体裁上シリアンコントロール文民統制が採られている会議に、少尉たち軍人の出番はあまり無い。

暇を持て余した少尉は、ARレンズと監視カメラで外の戦列艦を観察していた。

(Yuzuki@SGM：少尉^{マスター}、会議に集中してください。)

(X@2LT：はいはい、聴いてますよ。どうせ発言権はないし優秀な副官がメモも取ってくれてる、大丈夫。)

彼は仮想キーボードでチャットの返事をする、小さく欠伸をかみ殺した。

この会議で決まったことは、5日後に会談が行われること、会談終了後に

航空母機動部隊
航空護衛隊群は引き揚げることなどだった。

ゾロゾロと参加者が退席するなか、やっと終わったと安堵するゆかりが、隣りの少尉の顔を見ると彼は固まっている。彼のARレンズにはこうあった。

(Tsukuyomi@MAJ:いい度胸だな、後で私の部屋に來い。)

彼の上官からのものだった。

呼ばれた部屋の中で彼を待っていたのは、幼稚園児くらいの幼女、しかし彼女は年齢には不釣り合いな…、情報軍の制服と少佐の階級章を身につけていた。

事情を知らない者が見ればコスプレのように見えるが、彼女、VOICEROIDシリーズ『月読アイ』はれっきとした情報軍将校、そして少尉のかつての相棒でもあった。

シリーズ最古参級の彼女は、後発のVOICEROIDシリーズからは『先輩』『姉上』『ビッグマザー』と呼ばれることもある。

「喜べ少尉、お前は今から大尉待遇だ、久しぶりの昇任だな。」

月読少佐は少尉に、仏頂面で今のものより星が2つ多い階級章を手渡した。

「おやおや、このあと殉職する予定でも組まれてるんですか?」

思い当たる節があり過ぎて、心のなかでは冷や汗を流す少尉。

「安心しろ本国では今まで通りだぞ。ただのローカル箱付ランクだ、本当はもう一個上げたかったそうだ。昇任を蹴り続けてきたツケだな。正式な書面は後でくる。」

「そこまでしなくても、代わりに人間なんていくらでも居ると思えますがねえ。」

「本国の連中は、お前に帰ってきて欲しくないとき。だいたいお前、何年その階級に居座るつもりだ？」

実際、彼の階級は現役の同世代に比べれば低い。

「例の件以来、『時空遅延式魔法』で止まっていますからね。体に合わせて階級も見た目通りというわけで。」

「ふん、60過ぎのジジイが青年将校ごっこことは、笑わせてくれる。はあ…アニユンリールの呪いはまだ解けないか。」

ちなみに国防軍の定年は、帰化したエルフなどの長命種族に合わせ撤廃されている。「あなたのために必要だったことです。あの『南方事件』関係者は全滅、もう諦めましたよ。」

過去の40年ほど昔の、情報軍にしか記録のない消された出来事を挙げて、少尉は気にしていないというふうにはヒラヒラと手を振った。

「必要だったこと、か。ではパパとでも呼んでやろうか？」

「いえ、結構。それより今回持ち込む装備、また大掛かりですね。」

「それがあくまでも最低限度だ。さて、用事は済んだな、では別命あるまで待機しろ。」
礼をした少尉が部屋を出たあと、月読少佐は独りごちた。

「お互い歳を取らぬ同士か……。人の理に入ろうとする者と外れてしまった者、奴の寿命の代償ほどの価値は我々の『魂』にはたしてあるのか？」

ある提督の苦悩

船だという報告が信じられなかった。はじめは見知った『河都』湾内に白と灰色の岩礁が3つ増えたようにも見えた。『帝国』の魔導蒸気艦隊を預かる身として、この火竜列島を含む大西海をこの数年間、駆け回って来たがアレが船だとは信じがたい。

掲げている旗も見たことがない。念のため部下に便覧を持つてこさせたが、どこにも白地に赤丸の旗など無い。どこの船だというのだ？

「提督…、接触すべきでしょうか？」

「いや、まずアイツらに話を聞こう。」

分からぬ存在に無策では触れたくはない。大型船を囲むこの国の衛士に聞こうではないか。そう部下に伝え、我が国から輸出された旋回砲スライツェルガンで武装しているこの国、『サン』ユーオソキ双王国』の小型軍船へと進路を向かわせた。

「二ホン？聞いたことがないな。どこにある国だ？」

乗り込んで来た衛士によると、遙か西方にある国だという。大西海…別名『無限海』の向こうから来たと、にわかには信じたいが目の前には巨大船が実在している。

「大尉、灰色の二隻は軍艦だそうだがアレをどう見る？」

「平べったい方はおそらく竜母、でしょうな。しかしなんて大ききだ…、飛竜ワイバーンが何騎積めることやら。」

飛竜母艦、竜母と呼ばれる艦に我々が知る中ではよく似ている。マストが見当たらないということは、何かしらの動力源を積んでいるということか。帆装を全廃してるとすれば相当機関に自信があると云っていい。

もう一隻、更に大柄な巨艦には呆れるほど巨大な砲…？なのだろうか、一体何を想定しているというのか。艦の中央に多数備える比較的小型の砲でも、我が艦のどの砲よりも大きいだろう。

「我が『帝国』大西海艦隊をすべてかき集めて、アレを沈められるか？」
「不可能でしょうなあ、ラム・アタック体当たりでも全滅しそうだ。」

白い船の隣で『河都』と王城を守るように停泊する『帝国』製の1000門級と800門級戦列艦、ユーオソキの海軍最大の艦がまるで小船だ。風神の涙を利用する旧式艦とはいえ、このフリゲートに匹敵する大型艦だというのに。まるで神話の、古の魔法帝国の魔導戦艦ではないか。

「魔写を撮っておけ、後で総督府と本国に送らねばならん。」

万々に備え『ヴェステン』を回航させねば、灰色の巨艦に比べれば慎ましいがそれでも我々が持つ最大戦力の装甲艦だ。ないよりはマシだろう。

「ヴェステンは今どこに居たかな？」

「はっ、今朝の連絡によりますと、昨日『教都』に入港したそうです。」

「呼び戻せ、最速でだ。」

この国のもう一つの首都にいる船に思いを馳せ、この後総督府と本国向けに書かねばならない報告書に頭を痛める私を乗せ、フリゲートは港へと入って行った。

もう一つのファーストコンタクト

ファーストコンタクトから4日後、会談前日、ゆかりと少尉改め『大尉待遇少尉』の姿は、サン＝ユーオソキ双王国、首都『河都』近郊の砂浜にあった。

しかし、久しぶりの地面を踏みしめるのは二人だけではない。二人とは色違い、薄い緑の制服に身を包んだ陸軍の警務隊担当者が二人と、初夏にもかかわらず背広を着込んだ外務省の人間も二人同行していた。六人はユーオソキの王宮衛士と外交担当者の案内で会談場所の下見に来ていた。

軍人は四人とも腰に拳銃と共に、少尉と陸軍の担当者はサーベル、ゆかりは短剣を帯びている。未だ特権階級の残る国外での帯剣は、トラブルを防ぐため国防軍将校の常識となっている。ちなみに剣術の腕前は、ゆかりは並程度、少尉は生身の状態だと雑魚、とだけ言っておこう。

「こちらが会談の予定会場となっています。」

案内されたのは、ある貴族の別邸だという海辺にほど近い屋敷、見晴らしのいい丘の上からは河都湾が一望できた。

ARレンズの望遠機能を使うと、湾内を行き交う船の中に巨大な影が3つ、乗ってきて

た客船と『むさし』、『いず』だった。

「ん…、ちよつと少尉^{マスター}、アレ見てください。」

屋敷のバルコニーで、紫の髪を海風に揺らし行き交う舟や海を眺めていたゆかりが何かを見つける。

「はいはい、何でしょうかゆかりさん？」

大尉待遇になつても相変わらず少尉^{マスター}と呼ばれている彼が目にしたのは、魔石特有の鮮やかな煙を吐いて進む『魔導蒸気船』だった。

「へえ、蒸気船か、帆船と風神の涙しかないと思つたけど蒸気船も持っていたとは。…ん？旗が違うぞ、ユーオソキの船じゃないのか？」

二人は知る由もなかったが、その船の名は装甲艦『ヴェステン』、『帝国』大西海艦隊の最有力艦だった。

しばらく後、もう一度見たときには日本海軍の『むさし』、『いず』の手前を通り過ぎ屋敷の沖合で停泊、錨を下ろしたようだった。

「あんなところで何をするつもりなんだろうね。魚釣りか測量か。」

「さあ？後で海軍にでも聞いてみますか。」

後で調べるか、と思いつつ二人はバルコニーを後にした。

会談会場の下見を終え港まで戻るため馬車へ向かう六人、用意された馬車が四人乗り

だったため先に外交官と陸軍の担当者、後にゆかりと少尉の組み合わせとなった。

「怖い警務憲兵さんと一緒に嫌ですからね。」

「ボクたちと似たような仕事じゃない？ 共同作戦もやったし。」

「少尉、被疑対象を暗闇から引きずり出して裁判にかけるのと、暗闇に引きずり込んで

消し去るのは、違います。」

「その理屈だとウチの方が怖くない？」

浜沿いの石畳の路を歩きながらそんな話をする二人に、馬上から声をかける人物がいた。

「失礼、ニホンコクの方とお見受けする。」

馬から降りた男は、この国の物とは違う黒の軍服にサーベルを下げている。ええ、そうですが。と訝しげに応える少尉とゆかりに、男は続けた。

「私はヘルムート・フォン・ベルガー、ここから遠く東に離れた国：『帝国』大西海艦隊提督を務めている。」

従者も連れず現れた提督に少尉は、うわあ…他国の要人か面倒くさいなあ…と思いつつ心の中に留めて、

「初めまして、日本国防軍大尉の××です。こちらは部下の結月曹長。さて、提督閣下自
××
らなんの御用でしょうか？」

提督は真つ直ぐ少尉を見据えると、

「貴国はるか西から来たと聞いている。そこで我が国ともぜひ国交を結んで欲しいと思つてな。あのように巨大な装甲艦と竜母を操る国をぜひ知りたいのだ。良ければ後日あの船：『ヴェステン』に招待させていただきたい。」

沖合の装甲艦を指しそう言う提督に少尉は、アレこの人のところの船だったのか。砲艦外交：…面倒くせえ：…何で先に帰つちやうかな外務省と、思つても顔には出さずに、

「国交の開設を申し出ていただけるとは嬉しい限りです。しかし閣下、申し訳ないが、我々軍人にはその権限が与えられていません。ですが担当の者に取り次ぎはしておきましょう。我々は白い船に乗っておりますのでまた後日。それでは失礼します。」

提督は少し無念そうな顔を見せたが、

「そうか、ではくれぐれもよろしく頼む。私はこの国の海軍学校の教授も勤めている。何かあつたらそこに連絡をくれ。」

とだけ言つた。

提督と別れた二人は馬車の中で話す。

「さっきの船、装甲艦『東』に似てましたね。」

「うん、それと彼は『いず』のことを『竜母』と言つた。彼らが航空戦力を海上に展開できる証拠だ。報告が面倒だね。」

2000年ほど前の船を、データベースから例に挙げるゆかりと、かの国が竜母を保有している可能性を確認した少尉、話し込む二人を乗せた馬車は港へと向かった。

砲艦外交

サンユーオソキ双王国、『河都』郊外、晴天に恵まれ波の穏やかな日の浜辺、立ち入り禁止を示す移動式の柵の外や付近の小高い丘には見物のためか、黒山の人だかり、柵の内側には緊張した面持ちの王国衛士や諸侯が沖を見つめていた。

沖合には巨大な灰色の軍艦が二隻、はるか西からやって来た船の名は『むさし』『いず』、日本海軍の火力投射護衛艦戦艦と輸送艦揚陸艦だった。

来たるラヴァアーナルに備える『やまと型』四姉妹の次女は自身の存在意義である、姉よりも大口径の50口径480mm砲を異国の海に誇示している。

かつて姉が撃墜した、空中戦艦バル・キマイラや海上要塞バルカオンなどのラヴァアーナル超兵器群への大火力の直射をドクトリンとして、各種防衛システムと複合装甲で身を固め、核融合の炎を内に秘め、凶悪な火力を叩き込む、ステルス性を重視したスマー卜な外観とは裏腹に打撃力を凝集したような艦級。それが『やまと型』だった。

同じくラヴァアーナルへの対応と、世界各国の邦人保護のため兵力を展開できるような建造された『おおすみ型』輸送艦『いず』は自衛と対地支援のため、空母にも似通った全通式の飛行甲板と速射砲を装備している。

『いず』の後部ウエルドックから発進したのは、外務省交渉団と儀仗隊、そして情報軍の護衛部隊を詰め込んだエア・クツション型揚陸艇。

護衛部隊が情報軍なのは、陸軍所有の自律化戦闘人形トイや車両の迷彩塗装が、戦場で目立つこと、華美さを求める近代戦以前の軍装の価値観とのズレから新世界国家に侮られることを恐れてのものだった。

その点情報軍の兵器類は、濃紺とグレーをメインカラーとしていて儀仗隊との違和感も少ない上、小規模部隊での展開に慣れている。

相手を分析した上での徹底的な配慮、かつてのパーパルディア皇国第一外務局のような無能は日本政府に存在しない。

そして、それを実現するための組織が日本情報軍だった。病的とまで評される国内外の情報収集、分析、防諜、そして不穏分子の抹殺。すべては国家の存続と安寧のために、前身組織から引き継いだ任務は拡大し、独自の戦力を持つまでに至った。

上陸し、交渉団の会談会場までの道を形成するため、左右に展開する日本陸軍儀仗隊、そしてそれに応えるユーオソキ王宮衛士隊。銃剣付きの儀仗用ライフルと羽飾り付きの槍、交えずとも両国が誇る精鋭同士、互いの練度を見せ付けるといふ外交上の戦はすでに始まっている。

陸軍儀仗隊と共に上陸する情報軍護衛部隊の指揮官は、成人義体にサーベルと拳銃を

下げた礼服姿の月読少佐、横には少尉とゆかりも控えている。

三人の後ろに銃剣付きのアサルトライフルを携え整列するのは、濃紺にグレーの帯が入った58式自律化戦闘人形一個中隊、旧世代に属するものの情報軍によるカスタムとアミュレット下士官の練度により、最新の62式にも劣らない能力を持っている。

さらにその横には情報軍最大の装甲車両、35mm機関砲と対戦車ミサイルを装備した自律化装甲戦闘車まで揚陸されていた。

普段はヘビーカーカスタム自律化戦闘人形の分隊レベルを指揮するゆかりだが、最大では一個中隊規模を指揮下に置く能力をもつ。

儀仗隊と護衛部隊は、交渉団が出迎いのユーオソキ外交担当諸侯とともに会談会場の屋敷に入ったことを確かめると、会場内部の警護をユーオソキ王宮衛士に任せ砂浜に設置した天幕で待機に入った。

それを柵の外で遠巻きに見物する河都群衆の中に、魔写機を構えるこの国出身ではない人物があった。『帝国』総督府所属の彼が撮った魔写は、日本とユーオソキ初の外交交渉の様子として後の歴史書に載ることになる。

第二章・河都日常編

日本情報軍

この惑星の2つの月が満月となる日の夜、夕涼みというにはあまりにも遅い時間に少尉は暫定公館の中庭の東屋にいた。

「こんな夜中に物音がすると思ったら、何してるんですか、少尉^{マスター}？」

念のため自律化戦闘人形^{ロボイット兵}を連れてきたゆかりは少尉にライトの光を浴びせた。

「ちよつと寝つけなくてね…ゆかりさん、昔、月は一つしかなかったんだよ。」

「ああ、少尉^{マスター}は地球世代でしたね。」

ゆかりはライトを消すと、少尉の隣に腰を下ろした。

『天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも』、阿倍仲麻呂にはまだ帰る術があった。そしてボクたちには日本本土がある。でもそれが無い人たちも多くいる。」

故郷の地球とは異なる、2つに増えた月を見上げ、月明かりのもと少尉は小さく呟いた。

たまたまビジネスや観光で来日し、国家転移に巻き込まれた在日外国人たち、日本に

骨を埋める覚悟を決めた者、新世界で身を立てようと国外へ渡った者、自身のアイデンティティを守ろうと同郷人と新天地を開拓する者、彼らの多くは国家転移を受け入れ第二の人生を歩んだ。

しかしその中のごく一部には、故郷を失ったショックからか、犯罪に走る者もいた。その処分を極秘裏に、表沙汰になる前に行っていたのが日本情報軍の前身となる組織だった。

「国防四軍で最も多く同胞に銃を向けたのは、我々だろうね。」

転移直後、2010～20年代戦っていたのは旧自衛隊だけではない、警察、海上保安庁なども国内外の治安の維持に奔走した。そして当時は国家の指揮下になかった情報軍の前身組織もそれに協力していた。

明治政府樹立以前から、表舞台に出ることなく活動してきた日本の暗部、存在を知るものすら稀なある花の名で呼ばれた少年少女をエージェントとする組織。少尉は元々そこに所属していた。

「今でこそここに落ち着いているけど、これでも昔は支部を一つ預かっていたものだよ。」

「私の生まれる前の話ですか、確かその頃の名前は……」

少尉は名を出そうとした彼女を制し、続ける。

「ゆかりさん、もう解体された組織だ、今は防衛省：日本政府隷下の『日本情報軍』、ボクも国家公務員だ。政府黙認の独立組織も随分と落ちぶれたものさ。」

転移後、急増した国内の不穏分子、そして新興国たる日本国内へ潜入や工作を試みる各国のスパイ。組織は以前からオーバークワーク気味だったところに手痛い一撃を喰らった。

度重なる任務に、海外の人材を地球に置き去りにした政府からの新世界での活動要請。これにより人材、物資ともに消耗した組織は交渉の結果、政府の下に降ることを選んだ。

旧自衛隊の国防軍への、再編成のどさくさに紛れるようにして与えられた『日本情報軍』の名と、監視役として補充の名目で送り込まれた大量の人材、今では時の流れもあり、前身組織時代を知る人間は少尉を含めて数えるほどしかない。

「無茶な任務を続けて急速な人材不足に陥った我々は、元々得意だった人工知能分野に活路を求めた。」

「もしかして、それが…。」

それがVOICEROIDシリーズでは、という言葉を彼女は飲み込んだ。

「そう、組織で運用していた統合管制AIのノウハウを転用した研究は、組織が情報軍となった後も続けられ、ついには『魂』の再現にも成功した。表向きには民生技術を軍

用に用いたことになっていくけど、実際は逆だ。」

元々あらゆる情報収集と解析、Nシステムすら配下に置いていた組織自慢のAI、作戦の立案補助、報道管制、ネット上の世論の操作まで、弱いAIの巨大集合システムのノウハウは大きな下地となった。

秘匿されていることだが、ジエネラル汎生パーパス仕様はアミューレット軍事防衛仕様ののちに開発された。軍用が民生用の改良型ではなく民生用が軍用のモンキーモデルだった。

「月読少佐もその一人ですか、少佐の『パパと呼んでやろうか?』にそんな意味があったとは…。」

少尉はそれを肯定した。

「少佐の幼女ボディも相手を油断させるためですか…。目的のためとはいえそこまでするとは。」

「あく、それは違う。アレは試作型の義体、昔は軽くて小さいほうが整備とか実験がし易かったからね。完全に彼女の趣味だよ。軍も少年兵は認めていないし、三菱重工も口リコンじゃない。…さて、夜も遅いもう寝るよ。」

「少尉マスタ、私の義体も三菱製ですが開発には関わりましたか?」
自室に帰ろうと立った少尉をゆかりは引き留めた。

「ん?そうだけど?」

「私の胸部装甲が薄いのも少尉マスターと関係が…？」

彼女は、後発のVOICEROIDシリーズが自身より装甲が厚いことを気にしていた。

「いや、余計なモノが付いていると動作の回避プログラムが面倒で、軍発注と六菱製造とヤマバ小売で揉めに揉めてね、民生用と軍用で盛る、盛らないの大喧嘩、結局サイコロで決めたんだよ。ボクがサイコロ用意したんだけど、コレが特注で重心を偏らせてあつてね。狙い通り今のボディに決まったんだ。あのサイコロ、捨てられなくてどつかの秘宝館に寄贈したんだっけな、確か。ゆ、ゆかりさん、ちよつと何をするつもりかな？」

当時のことをペラペラと話す彼に、ゆかりは腰の電撃警棒ジョックスティックを片手に詰め寄った。

「少尉マスター、少し私の部屋でお話しをしませんか？」

「待ってくれ、それは話し合うスタイルじゃな——アババツ！？」

青白い電光と少尉の悲鳴は、警備センサーの反応が無いまま夜に消えた。

新世界の星

どうもっ！日本国外務省東方世界担当部書記官、『継星あかり』です！

私はいま『サンユーオソキ双王国』、日本政府暫定公館でお仕事をしています。

この国がどこにあるかというのと、カルミアーク王国を始めとする大環島よりも更に東、なんとこの星の裏側にまで来てしまいました！

先日、国交が開設されたばかりの国でお仕事ができ嬉しい限りです！

「おはようございます。」

彼女はゆかりさん、在ユーオソキ日本公館の警護兼駐在武官の軍人さんです。本来の所属は情報軍ちゅうほうぐんだそうです。

薄いグレーの制服が凛々しいですねっ。

「おや、いつも一緒にいる大尉（期間限定）さんが見当たりませんか？」

「馬鹿野郎なら寝坊です。」

そうですね、珍しいですね。夜中に悲鳴が聞こえたような気がしたので見に行ったら、ゆかりさんと自律化戦闘人形トロボイさんが大きな袋を運んでいたことも、朝、その袋がゆかりさんの部屋の前でモゾモゾ動いていたこともたぶん無関係でしょう。

触らぬ神に祟りなしです。

さて、朝ごはんを食べたら今日は調査も兼ねて市場にお買い物にいきましょう。この『河都』は海に面していて、新鮮な魚介類が豊富に採れるそうです。

準備を整えて、門番の自律化戦闘人形さんに挨拶するとピシツと敬礼を返してくれました。無感情に見える人たちですが、意外と愛嬌があるんですよ？

今日の足は、濃紺の車体にグレーの帯が入った、前方に国旗付きの小型トラックです。在外公館の公用車は各国のインフラに合わせて、色々な車が使われています。過去には、自転車やバイクに国旗を取り付けていたこともあるそうです。

国防軍から借りたトラックですがピカピカに磨き上げられていますね。朝日が反射して眩しいです。

「貧乳好きの変態が昨日洗ってましたからね。」

さつきから、大尉（期間限定）さんの呼び方がおかしい気がしますますが気のせいでしょう。

さあ、後部座席に護衛兼荷物持ちの自律化戦闘人形さんを乗せて、運転はゆかりさん、私は助手席に乗ります。道路交通法はありませんが、シートベルトはしっかりと締めましょう。

「%だ…。これが格差社会…。これが民生用と軍用の差つ…。」

一体何の話でしょうか？

今日も雲ひとつない、いいお天気です。未舗装の土の道をガタゴトとゆつくり走っていきます。一応レベル5の自律化されているトラックですが、交通システムが未発達のところでは、今のゆかりさんのように運転手がハンドルを握ることが多いですね。

…揺られていたら眠くなってきました。ゆかりさん…着いたら起こしてください…。

以上…、在ユーオソキ日本公館から継屋あかりでした…。

留守番

この日、ゆかりに言わせれば『寝坊した』少尉は、人が入りそうな大きな麻袋をゴミ箱に畳んで突っ込むと、鎖の切れた手錠をカチャカチャと鳴らしながら食堂のドアを開けた。

「おはよう。ゆかりさんと継星さんは、もう出かけちゃった?…それと朝ごはんまだあるかい?」

「早うないですよ、それ自分でチンしてくださいね。」

無ければ、お茶とレーションで済ませるか、チーズ味が好きだけどパサパサしてるんだよなあ…と考えている少尉に、呆れ顔で皿や鍋を洗いながら返事したのはキツチンを預かる公館料理人の一人でVOICEROIDシリーズでもある『琴葉茜』だった。

「夜更かしか、何してたんや大尉(仮)さん、そんなモンぶら下げて?」

「あくちよつと、手品の練習を。しかし置いていくなんて薄情だなあ、装甲厚を決めたのは技研の連中で、ボクは協力しただけなのに。」

適当に誤魔化して小さく文句を呟きながら、テーブルの隅にラップを掛けて置いてある朝食をレンジに入れると、眠そうな顔で欠伸をした。

珍しいブレスレットをはめた少尉の様子をみて何かを察した茜は、

「ゆかりさんに胸部装甲の話はあかんで、前に『私の義体はどの機種も装甲が薄い…、これは何かの陰謀です。首領を見つけてぶっ〇してやりますよ。』とかゆーてた。ソコ気にしとるゆかりさん多いんやで。」

それを聞いた少尉は、——他のゆかりさんにバレたら大変なことになるな…日本に帰れなくなるぞ…と、『結月ゆかり』タイプの総数を思い出して背中に薄ら寒いものを感じる。

「技研も六菱も努力したんだけど、謎の不具合が連続した上、予算が尽きて新規義体の開発は凍結されたんだ。えくと、お茶っ葉は？」

実際、新規義体の開発に十億単位の金が掛かること、国防軍が増加装甲タイプに興味を示さなかったことから『結月ゆかり』シリーズの義体は総じて装甲が薄い。

急須に茶葉を入れながら、ボク悪くないもんとでも言うような少尉に茜は、手刀を自分の首に当てて聞いた。

「じゃあ、ここから下すげ替えるのはアカンのか？」

「頂きます。ダメだね、『魂』は簡単に移し替えることはできない。そして義体の乗り換えは同じ『結月ゆかり』タイプじゃないと不具合を起こす。」

「私はずっとこの身体やけど、少佐ちゃんはしよっちゅう乗り換えてるで。」

茜は、食堂の隅のベンチに眠ったように座る『外出中、触ったら殺す』と貼り紙のある月読少佐の幼女義体を指した。

「彼女は予算度外視のプロトタイプだからね。スマホのSIMカード感覚で抜き差しするもんじゃないよ、普通は。」

人類は、科学と魔導の成果として『魂』の再現には成功したものの、その原理については全くの未解明だった。一度義体に『魂』を入れると時間に応じて、魂が身体に同化してしまう。この分野については上位存在の領域、暴くのは人類には早いというのが研究者の見解だった。

同じシリーズであれば多少の融通がきくが、他のシリーズへの乗り越えはメーカーも推奨していない。テセウスの船方式で『魂』を騙す方法もあるが、年単位の時間がかかる上、いつ不具合が起こるか分からないことから実行する者はあまり居ない。

月読少佐が容易に乗り換えられるのは、プロトタイプであり実験義体の頻繁な交換を想定されているため、後発のVOICEROIDシリーズとは『魂』の接続方法が異なっているからだ。それでも義体との癒着を防ぐため、成人義体と幼年義体の往復を繰り返している。

「引越しは臓器移植くらいか、それ以上に難しいとは聞いたけど、ウチらにえらい詳しくそうやな、メーカーの回しモンか？大尉（仮）さん。」

「禁則事項です。」

本当の年齢がバレそうなセリフで誤魔化す少尉だった。

「遠隔操作が解禁されればなく。ウチも忙しいとき腕増やしたいわ。」

「たぶん難しいよ、ゆかりさん曰く『ラッシュ時に車を手動で運転しながら、助手席と将棋を指して合間に煎り豆を箸で食べるようなもの』だとか。」

義体の遠隔操作はセキュリティ上の問題と、悪用を防ぐため法律で制限されている。操作を許されているのは軍や警察、消防などの職に就く者だけだった。

その専門職でも同時に操るのは1、2体が普通だ。しかしアミュレット下士官は最大で一個中隊の自律化戦闘人形ドロイド兵を操る。兵士は自律化されているとはいえ、このマルチャスク技術は発祥元ならではのものだった。

「せやか、あつ、少佐ちゃん昼には帰るって言ってたで。」

「それまで待機か、昨日は車洗ったし今日は部下ドロイド兵のメンテでもしますかね。」

最低一人武官は公館に待機する規則で動けない少尉は、焼き鮭を皮まで食べると今日の予定を決めた。

手錠を切る為に少佐やゆかりの振動軍刀ヴァイブソードの代わりに使った、自分の溶断軍刀ヒートソードで軽く火傷をするのはこの後のことだった。

『帝国』大西海総督府

サン＝ユーオソキ双王国が位置する火竜列島から東、東方と西方の要衝となる島に『帝国』は大西海地方の植民地の管理、各国との折衝のため総督府を置いていた。

大西海に面する各国の公館、商館が並ぶなか、一際壮麗な宮殿か要塞のような、白を基調とする建物、それが『帝国』大西海総督府本庁舎である。

庁舎で最も調度品の格式高い豪華な部屋、つまり総督執務室では部屋の主が、決裁書類の山を机の隅にどけてある報告書を読んでいた。

飛竜便を使つてまで彼のもとに届けられたユーオソキからの報告書と資料には、魔写付きでにわかには信じがたいことが書かれている。

報告者は海軍大西海艦隊のベルガー提督、正確性は保障されていると見てよかつた。提督直筆の几帳面な性格が滲み出る報告書には、ある未知の国について記されていた。

大西海の向こうから国交と通商を求め、来たというニホンなる国、同封された魔写には巨大装甲艦と並ぶ船、大西海艦隊最有力艦『ヴェステン』が写っている。

伝統的に陸軍国だった『帝国』が大西海開発にあたって整備した大西海艦隊の旗艦、厚

さ150 m m を超える帯魔鋼とチーク材の複合装甲に、艦首28 c m 魔導カノン砲、^{ワイバーン}飛竜に対抗するための対空轟連式魔導砲^{ガトリック砲}を装備し、風に頼ることなく風神の涙よりも効率よく魔石を燃やし大海を自在に動く、海軍が誇る最新鋭魔導装甲艦が、未知の国の軍艦と並ぶとまるで小舟だ。

その他にも同封された魔写には、巨大竜母や陸を疾走する船、鋼鉄の地竜、連発銃を携える兵士など国力と武力を伺わせる様子が見て取れた。

彼の国からの資料の写本によればニホンは星の裏側、第三文明圏の盟主だという。これほどの国が第『三』文明圏、つまり更に上があるということは、星の裏側がどのような魔境か総督には想像がつかなかった。

『帝国』は星央列強でも中堅に位置するが、実のところその植民地は他の列強諸国に比べれば遥かに小さい。阿南大陸の植民地獲得競争に出遅れた『帝国』は、未だ星央の手が伸びていない西方へと活路を求めた。

しかし、商圈の予定となる西方での最大国、大セーカ国が他の星央列強の干渉により、群雄割拠の内乱状態となり迂闊に手が出せなくなってしまう。『阿南で飽き足らず、月まで分割するつもり業突く張り共め。』当時の西方植民地担当大臣は、このような恨み言を遺している。

混迷極まる列強同士の代理戦争で、肅清と革命の嵐が吹き荒れ崩壊寸前の国から手を

引いた『帝国』は大西海へと目を向ける。

『大西海は帝国の生命線。』これが総督の口癖だった。大西海帝国領から得られる豊富な資源、金属鉱石、魔石、ゴム、木材、農産物どれも本土を潤す重要な資源だった。そしてサン＝ユーオソキ双王国、この国はこの地方で大セーカに次ぐ規模の国で資源の一時加工先として、そして本国で生産される製品の市場として有望な国だった。さらに将来、いずれはユーオソキを基点に更に東方の大西海の先にまで手を伸ばそうとしていたが、日本に先手を取られる形となった。

「大変なことになる……ユーオソキがニホンになびいたら我が国はおしまいだ……」

大西海を資源の供給地、自国経済圏と定めた『帝国』にとつてユーオソキは自国の拠点となる重要国だった。そのためにユーオソキの近代化を後押しし、列強や大西海諸国からの自衛のために軍備を整えさせるため、国家戦略として莫大な額を投資してきた。港湾の整備、工場の建設、魔信ネットワークの開設、蒸気鉄道計画、他列強が幅を利かせる阿南大陸植民地の代替として育て上げる予定の国が掠め取られるようなものだった。

もし、もし仮にユーオソキが『帝国』よりも、ニホンについた方が利が大きいと判断し『帝国』と別れることになれば、大西海での影響力を大幅に失うことになる。そうなれば今本土で盛り上がる大西海バブルが弾け、大混乱になることは明白だった。

せめて、ニホンが苛烈な交渉条件や宣戦布告をしてくれればユーオソキと共に戦うこともできただろう。しかし、添付された資料にある彼の国の要求は星中央列強が他国に結ばせる不平等条約のようなものではなく、砲艦外交めいて鋼鉄の巨大艦で押しつけてきたとは思えぬ、極めて穏当な国交と通商を求めるものだった。

しかしこれはユーオソキには善意に見えるだろうが『帝国』にとつては悪意としか受け止められないものだった。国家規模の離間の計を仕掛けられたに等しい、うがった見方によれば『帝国』経済圏への宣戦布告とも取れる交渉案だった。

「早急に手を打たねば……。」

総督はそう呟き、ベルガー提督や外務省の駐ユーオソキ外交官に更なる報告を求める書状をしたため秘書に速達で届けるよう命ずると、総督府幹部を招集するため机の上の魔信機を手を取った。

西から昇る太陽、日本国、非常識な存在に『帝国』は立ち向かうことになる。

地球の亡霊

内乱により星中央列強各国の支援する軍閥が群雄割拠する大セーカ国、皇帝すら行方不明の国の、ある地方軍閥の兵器工廠では二人の若い兵士が雷管式前装ライフルを手に歩哨についていた。

「…暇だな。」

その言葉に、隣にいた同僚が苦笑した。

「仕方ないさ、ここは後方だぜ？」

「こう、何も起きないと志願した意味がないような気がしてな。」

農家の四男に生まれた彼は退屈な日常に飽き、刺激を求めて功名心から革命軍に志願していた。

「立つてるだけで金が貰える。結構じゃないか、平和が一番さ。」

戦乱を巻き起こした革命軍の構成員とは思えぬセリフを呟いた相手は、ライフルを壁に立て掛けタバコを取り出すとマッチを擦ろうとした。その刹那、

ブシユン！

タバコを啜えた彼は眉間に孔を開け、給金を受け取ることなくその生涯を終えた。

「えっ?!

農家の四男は驚き、一瞬身が固まってしまった。我に帰り身を伏せようとするが、
ブシュン!

その隙は見逃されることなく、驚愕の表情のまま歴史に名を遺すことなく相方と同じ
末路を辿った。

二人から数百メートル離れた森の中、この国には存在するはずの無い、7・62mm
亜音速弾を使用する狙撃銃を構える人物がいた。ギリースーツの下の黒で統一された
装備の肩には小さく『鈴蘭と彼岸花を啜える八咫鳥』のエンブレムが刺繍されている。
その下には『大東洋統合警備保障』の文字。

「歩哨を排除した、周囲に敵影なし。」

『了解、これより突入する、援護を頼む。出るまで撃つなよ?』

「遅刻する奴は嫌いだ。」

『おっかねえ、野郎ども姫は時間にうるさい、さつさと済ませるぞ。』

工廠前の草むらを掻き分けて現れ、死体のチェックを済ませ門をくぐるのは、迷彩塗
装の自動甲冑に減音器付きのサブマシンガンや銃身を大幅にカットした12.7mm
対物ライフルを装備する集団。彼らは名前こそ警備会社風だが、工事現場で誘導棒を振
るわけではない。戦場でアサルトライフルを振るう民間軍事会社の傭兵^{コントラクター}だつた。

素早く工廠の建物内に入ると、各所に分散、不運にも鉢合わせた敵兵を減音器特有の気の抜けた銃声と共に排除、建物内の革命軍幹部の私室や作戦室を搜索、命乞いをする幹部に無言で鉛弾の返事をして目標となる暗号表や作戦書類を回収すると、目撃者を消しつつ撤収した。

「20秒遅刻だ。」

『家主が居たもんでね、世間話してたら遅くなっちゃいました。』

「そうか。軽迫撃で。」

それを合図に、死体が見つかったのか騒がしくなり始めた建物が爆発した。

「初弾命中、やるじゃないか。諸元そのまま全力で撃て。」

さらに工廠各所から爆炎、ついには在庫の弾薬に引火したのか魔石特有のカラフルな爆発を起こし、革命軍工廠は跡形もなく吹き飛んだ。

「撃ち方止め、撤収するぞ。」

『『帰るまでが遠足です。』ってね。姫こちらは準備完了です。』

隊長格の自動甲冑が草むらに偽装してあった軽装甲車から声を掛けると、姫と呼ばれた人物は狙撃銃をケースに収め、頷くとその軽装甲車に乗り込んだ。

迫撃砲を牽引する軍用トラックと車列を組む軽装甲車の車内で、

「このところロデニウス産の弾ばかりだ。」

と愚痴をこぼす隊長格に姫は、

「じゃあ、こつちを使え。」

と技術水準の推測のため持ち帰った、軍閥工廠製の雷管式前装ライフルを手渡した。

「こりや弾が飛び出る槍ですぜ。ミリシアルのLA59のほうがまだマシだ。」

軍閥ライフルを弄り回すと有名な駄作銃を引き合いに出し、姫に返した。

なぜ日本から遠く離れた星の裏側大西海、大セーカ国に『大東洋統合警備保障』の日本人が居るのか。これには日本の闇が関係していた。

VOICEEROIDシリーズとその廉価版の自律化戦闘人形ロボイド兵を実用化した国防軍は、兵階級をほとんどこれに置き換えた。異世界に転移しても少子高齢化の止まらぬ昨今、国民は人が死ぬことに敏感だ。

死ぬのは将校で充分、これが日本政府、国防軍の方針となった。それに伴いほとんど旧自衛隊の自衛官は昇任試験と教育を受け士官階級となった。しかしながらそれが叶わなかった者や、新生国防軍が肌に合わなかった者もいた。

軍拡と省人化の両立、その割りを食ったのが彼らだった。下野した彼らの中には国外で民間軍事会社PMCを立ち上げる者もいた。この『大東洋統合警備保障』もその一つ、元陸自と、ある組織の元構成員が立ち上げた企業だった。

「俺たちは学が無いからアレですが、姫には情報軍に残る道もあったでしょう？」

「自律化戦闘人形ブリキの兵隊と今の政府が気に入らんからさ。使デイスボーザブルい捨て同然で働かせたくせに、今

度は『日本情報軍』の名で政府の下につかせてやるだつて？クソ喰らえだ。」

彼女は以前、情報軍の前身組織に籍を置いていた。しかし日本政府の、前身組織に対するぞんざいな扱いが彼女を始めする一部の人間を出奔させた。

『南方事件』で何があつたか知つてるか？アイツら艦砲射撃で、私らごと吹き飛ばそうとしたんだぞ。その上アニウンリールの呪いでこんな身体になつちまつた。どうか帰つたら古巣は解体、組織は政府の指揮下に入れときた。議事堂ごと内閣総辞職させてやろうかと思つたが、馬鹿らしくなつて逃げてきたわけさ。」

遠い過去の出来事を挙げ、自身が情報軍へ移らなかつた理由を明かした。

「いつまでも若々しくて結構じゃないですか。で、姫次の仕事は？」

「社長と呼べ、次はユーオソキに行くぞ『帝国』が呼びびだ。河都にヤツが来ているらし。」

隊長格は、ヤツ？と聞き返す。

「昔の同僚さ、今じゃ情報軍の将校様だ。挨拶くらいはしてやるさ。」

獯猛な笑みを浮かべた彼女と傭兵コントラクターを乗せ、軽装甲車は依頼主の元へ走つた。

現地協力者

火竜列島、ユーオソキ『河都』の暫定日本公使館、元は修道院だったという建物。

その一室を背の低いパーテーションで区切る形で間借りする、三人の情報軍ユーオソキ駐在員。

一人は、河都の本屋で入手した火竜列島語で書かれた本のページを、小さな手で捲りその瞳でスキヤンする月読少佐。

もう一人は、算盤の珠に似た髪留めの縁を虹の七色に輝かせ、分単位で更新される外務省制作の翻訳辞書と照らし合わせ、日本語へ変換するゆかり。

最後に、ハイライトの消えた目でモニターを見つめ、昔ながらのマウスを握り、物理キーボードを叩いて分類、カテゴリー分けする少尉。

星の裏側という僻地、衛星の通信量にも限りがあるため本国のサーバを利用できない三人は、注釈やメモが貼られた装丁もジャンルも様々な書類や文献の山に埋もれて地道な翻訳を続けていた。

ユーオソキの歴史、文化を知ることにも情報軍の大切な仕事だ。

ときおり涼しい風が窓から、文鎮の下の紙とVOICEROIDの髪を揺らす。紙を

捲る音と、キーボードを叩く音、部屋の隅の複合機が紙を吐き出す音しか聞こえないなか、コキリ、と首を鳴らした少尉は腕を真上に伸ばして背伸び。チタン合金やセラミックスの複合材と人工筋肉を人工皮膚で覆う義体をもつ VOICEROID に比べて、自然種：ホモ・サピエンスの彼は遥かに脆弱だ。

「少尉^{マスタ}、休憩をおすすめします。」

「ああ、ホモサピは弱つちいからな。」

悪いねえ、と言いつつ、肉体年齢20代とは思えぬ異音を立てて彼は立った。アニユンリールの呪いで不老とはいえ、デスクワークの疲労は溜まる。

——応接室の椅子でもかっばらって来ようかな？ 普段、肘掛けが付いている程度の安物の椅子を温めている少尉は、そんな冗談を考えながら気晴らしに外に出た。

制帽を被り腰に警棒をぶら下げ、立哨の自律化^ト戦闘^ロ人形^兵にご苦労さん、と声を掛け公使館の門を出ると、夜に降った雨の水たまりを避けつつ、公使館の周囲をパトロールがてら一周する。

——この国にも梅雨はあるのかな？ 『河都』成立400年以来この国は平穏が続いている。治安も良好、ゆかりも少尉もこの国ではまだ銃も警棒も抜いたことはない。

遠く『教都』で燻る火種を知るものはまだ多くない。

雨上がりの夏の空気を吸い、スツキリと冴えた頭で戻ると公館の前をウロウロする不

審人物が一人。どうやら立哨の自律化戦闘人形に声を掛けるか迷っているようだった。弾倉なしの着剣済みアサルトライフルを携える自律化戦闘人形は微動だにしない。話しかければ対応するが、それまではセンサーで周囲を警戒するのみだ。そこで少尉は声をかけることにした。

「うちに何かご用でしょうか？」

突然声をかけられたことに驚きつつ振り向いたのは、まだ成人していないと思しき少年。腰に短剣を吊るしていることから、家督を継いでいない貴族階級の子弟らしかった。

この国の貴族階級には成年するか、家督を継ぐと長剣の帯刀を許される風習があると、外務省からレクチャラーを受けていた。ちなみに、ゆかりはそれから儀礼用の短剣ではなく、実戦用の振動軍刀ヴァイブローソードを下げている。

「はいっ、二、ニホンの方ですか？」

少年は、流暢な火竜列島語で話しかけられたことに驚いたようだった。

少尉は火竜列島語を話せるわけではない、国家転移以前に生を受けた者：地球世代の特権、謎翻訳の効果だった。今ではこの原理はほとんど解明され、VOICEEROIDシリーズにもそのパッチが搭載されている。

日本が新世界へ進出するにあたってこの恩恵は計り知れない。転移当初、クワトイネ

公国やクイラ王国との意思疎通に難があつたとすれば日本はその時点で滅んでいたかもしれない。この恩恵はラヴァーナルの神話、太陽神の使いの伝承に並んで、上位存在の実在性を伺わせるものだった。情報軍は調査を怠らない、決してその日が来るまでは。

「帝国語の辞書を譲って…あ、いや、写本させていただきたいのです。」

「辞書？…ああ、あれか、いいと思いますよ。中へどうぞ。」

少尉は、入手した本の山に他とは異なる、革で装丁された厚い本があつたことを思い出した。おそらく二言語で書かれていて構成が辞書らしかったため、後で外務省か本国の専門班にでも渡そうかと隅に寄せた本だった。

頼みを快諾すると自律化戦闘人形トロイド兵に飲み物を持つてくるよう伝え、少年を連れて会議室へ向かった。ガランとした聖堂を抜け、庭の装輪装甲車を横目に歴史を感じる石張りの廊下を歩き、会議室として使っている部屋のドアを開けると、もわつとした熱気が二人を襲う。暫定公館に空調工事は行われていなかった。

顔をしかめた少尉は窓を開け、扇風機を回すと、パイプ椅子を出して座って待つよう促した。

「これで全部だったかな？ゆかりさんありがとう。スピカもご苦労さん。」

十数冊にもなる手書きの火竜列島語と『帝国』語の辞書が、少尉とゆかりの手によつ

て会議室のテーブルへと積み上げられた。

「この本でいいかな? えーと。」

「凄いい、全巻ある…あつ、名乗り遅れました、マルソー、ジャン・マルソーです。」

少尉が言い淀むと、少年はそう名乗った。少尉とゆかりも自己紹介をして、運ぶのを手伝ったゆかりと、お茶出しの自律化戦闘人形^{ドロボイ兵}が出ていくと、自分もパイプ椅子に座り少年に冷たい麦茶を勧め問いかける。

「課題か何かかい? 偉いねえ。わざわざこんなところまで来て調べ物とは。」

「…まあ、そんなところです。」

実際のところ、ジャン少年は『河都』ではまだ貴重な帝国語の辞書の写本を『帝国』の学問を学ぶ者に売ろうとしていた。地球の歴史上でも印刷術の未発達な時代によく行われていたことだ。著作権の概念はまだこの国には無い。

——少年はたぶん学生か。そういえば、ゆかりさんもボクたちでいえば小中高にあたる旧制VOICEROID訓練校を出て、何年になったっけな? 懐かしいな、地本のフリして説明会に行ったら不審者と思われる通報されかけたっけ。

少尉が過去に意識をとばし、コップの水滴がコースターに水たまりをつくった頃、

「…終わった。」

ジャン少年はペンを置いた。

「もう終わったの？早いね。」

少尉が腕時計を見ると、分針が一周半した程度だった。

「はい、一部分だけ写したかったもので…。ありがとうございました。」

「お安い御用で。ところで君、学生さん？」

少尉は何かを思いついたようだった。

「そうですが、恥ずかしながらまだ仕官先が決まらず…。」

来年度には、帝国の語学を学ぶ河都王立学校を卒業予定の彼だが、自身の同輩に比べて、コネクションの無い小貴族の彼はまだ進路を決めかねていた。勤め先を決める同輩たちに焦りを感じつつ、貴重な書物の写本で小遣いを稼ぐ日々だった。

それを聞いた少尉は悪い顔をする。

「君、よかつたらココで働かない？ちょうど通訳を募集しているんだ。」

自分たちで翻訳するよりも、ジャン少年に火竜列島語や帝国語を読み上げてもらい、それを書き起こしたほうが速い。実際、外務省ではこの方法で急速に辞書の作成が行われていた。

情報軍の三人は、外務省から借りられる人材も限られるため、自分たち専門の翻訳家を欲していた。

「まあ、検討だけでも、ね。」

そう言うと、A R レンズと仮想キーボードを叩き、紙に印刷した公館の正規職員の募集要項を渡した。

アリアルさんの大冒険—1

やあ、アリアルさんだよ。私の職業は考古学者、世界中を飛び回ってラヴァーナルの遺産や遺跡の研究が専門だね。少し前までは第一文明圏：ミリシアルの魔帝対策省に出向していたんだが、追い出さ：ゲフンゲフン、ここには収まらない才覚だと言われて遙々星の裏側、最近国交を結んだばかりという『サン＝ユーオソキ双王国』に来たわけだよ。

軍の大型輸送機が着陸したのは土を均したただけの、簡素な滑走路。これは凄い国に来てしまったな、これがこの国唯一の空港だというから、全くこれからが楽しみだね。

輸送機のタラップを降りた先で『歓迎！M大学ラヴァーナ研究室 アリアル様 ミリアル様』のウェルカムボードを掲げるのは：少尉じゃないか。

本名は知らないが、前にフィールドワークの護衛についてもらったことがある。彼もここに左遷：ゴホン、異動していたとは、何かの縁だね。

「お久しぶりだねえ：アリアル先生。前みたいなのは二度と御免だからよろしく頼むよ？…ん、ミリアルさんは？」

銃剣一本で地リントツルム竜と戦わせたことは謝るよ、軍の自動甲冑アーマースーツに耐熱性が付与されたのは

あの件以来だったかな。

「ミリアルはカルミアークで途中下車さ、なーにボク一人で大丈夫だよ。」

カルミアーク王国の遺跡で新しい遺物が発見されたとかで急遽、妹のミリアルを残しボクだけが先に来たのさ。

「…ポンコツを送り出して優秀な方を残したのか…。」

おい、聞こえてるぞ。

さて、荷物を下ろして、少尉の運転する高機動車で滑走路の端のプレハブ小屋の群れへ向かう。今どき手動運転とは、相変わらずキミはローテクなものを好むね。…ハンドルを握って音楽を聴くのが好き？そうかい、でもこの車はオーブントップだぞ？私たちがみたいに擬似ニューロン内で流せないと思うが。気分の問題？そういうものか、ホモ・サピエンスの考えることはよく分からないな。

ごく簡単な入国手続きを終えると、ロビーで私達を待つVOICEROIDがいた。

あれ？知っているぞ！…ゆかり、ゆかりだ！訓練校以来じゃないか、なぜユーオソキに？

私達CoeFontシリーズと彼女達VOICEROIDシリーズは生まれこそ違
うが、ゆかりとは訓練校の同期だった。

こんなところで会うとは、世間も案外狭いものかもな。

「久しぶりアライ、ようこそユーオソキへ。…少尉^{マスター}、ミリアルは私の訓練校の同期です。」

知り合いかい？と聞く少尉にゆかりはそう答えた。少尉^{マスター}？今彼をマスターと言ったか、ふん。マスター^{観愛なる者}か、ゆかりにそう呼ばれるとはキミも隅に置けないねえ。え、気持ち悪いにやけ顔をするなって？失敬な。

野暮用があるという少尉を残して、ゆかりと二人で野戦飛行場じみた空港のゲートを出た。

なあ、さつきチラツと見えたんだが、警備が空軍じゃなくて民間なんだな。いや、大抵の租借地は軍の要塞じみた警備体制だからさ。

「確かに、フェン王国の悲劇があるから、邦人が逃げ込んで脱出できる程度の備えがあることが多いね。」

駐留しているのは空軍の整備部隊程度で、警備は民間^P軍事^M会社^C…日系企業の大東洋統合警備保障が請け負っているとか。

「軍の駐留を侵略云々と騒ぐ勢力もあるから、ここでは民間の警備会社に外注ってポーズをとっているのよ。」

自走高射機関砲や軽戦車を装備した警備員ね…。本音と建前はお家芸ってとこか、大して変わらんだろうに難儀だねえ。

さて、ボクを呼んだ理由をあらためて詳しく説明してもらおうか？キミたちじゃ手に負えない案件だそうだってね。

もう読んだらうけど、と前置きしてゆかりがARレンズに飛ばしてきた資料には、ユーオソキ『河都』成立の伝説が記されていた。

——昔々、400年以上前、火竜列島統一前のユーオソキ『教都』にある日、魔王を名乗る鬼が現れ、都を明け渡すよう要求、拒否したところ教王を殺害して『三月以内に余の即位の準備をせよ。』と言い残し都を破壊して西に立ち去ったそう。

混乱に陥るなか破れかぶれの魔王討伐軍の西異対將軍を押しつけるように任されたのが後の河都：：当時は蛮西と呼ばれた地の領主、初代河都王だった。当時の教都貴族は『倒せれば僥倖、負けたらアイツが勝手にやりました。』のつもりだったらしい。

初代王は蛮西で魔素の特に濃い地域、フターラの地で降伏の意を伝えたいと呼び出したそう。そして戴冠式の服を採寸したいと、教都の仕立て職人を呼んで鎧を脱いだところを当時星央から伝来した最新鋭の兵器、朝霧と天然の魔素に隠した大量の魔導砲で一斉射、見事討ち取ったそう。足元に釘入りの火薬樽まで埋めた念の入れようだったそう。魔王は爆死、それでも原形をとどめたミイラは今でもフターラの地で祀られている。

魔王を討伐した彼、初代トクⅡサンは勢いに乗ってユーオソキを統一、ついには幼い

新教王から政権を預けられトクⅡサン朝河都王府を開いたと。

…魔王。同じ存在かは分からないが、ボクたちは知っている。古代ラヴァーナルの人類管理用生物兵器。国防軍、旧自衛隊はコイツの討伐実績を持っている。世界に残るラヴァーナルの残滓、ワクワクするじゃないか。未知を解き明かすのは大好きだ。今回は『当たり前』の予感がするよ、楽しみだね。フフツ。

実演販売

河都の外れ、まばらに丈の短い草の生える野原では、フリントロック式マスケットを構えた濃緑の軍服姿の兵士が軽快な太鼓と笛の音色に合わせ、横隊で前進している。歩調を揃え行進するのは、河都王立陸軍第一連隊。ユーオソキの実質的国軍の兵士だった。

やがて、太鼓の合図で停止、最前列でたなびく軍旗の横の士官が号令を掛けると銃を構え一列目が斉射、銃声と白煙が平原に轟いた。再び号令、続く二列目、三列目が発砲、これを数回繰り返すと士官が鋭い笛の音を鳴らしてサーベルを振り上げる。

着剣した兵士は、怒号とともに駆け足から徐々に全速力で走り出し銃剣突撃、棒立ちの敵兵へ次々とサーベルや銃剣を突き刺し斬りつけた。

しかし敵兵は悲鳴を上げること、血を流すことも無い。敵は藁人形、ここは王立陸軍練兵場、そして今は演習の最中だった。

「少尉^{マスター}、どう見えますか？」

「練度はまあ、よし、だが古い。そしてミスマッチ。」

少し離れたところから、戦列歩兵をARレンズの望遠機能と戦闘支援システムで観戦

する二人はそんな言葉を交わしていた。

「ゆかりさん、山がちなの国であれほどの兵士を行進させられる場所がどれほどあるのかな？」

「河都平原はいいでしょうが、山間部では厳しいでしょうね。散兵の方が有利だと思います。」

ユーオソキの位置する火竜列島は大陸プレートと海洋プレートの噛み合う上にあり、名の通り火山が多く平原の少ない場所だった。『帝国』式の教練は平原の多い星央大陸に合わせた、ユーオソキの実情とはズレていた。

だがこれは練度の低い新兵を使う戦術、ある程度の訓練を積んだ兵は次へ進む。

精度の高い雷管式前装ライフルを装備した兵士が分隊規模で機動する散兵戦術、山がちなユーオソキではこちらのほうが適している。国産の旧式マスケットに『帝国』式戦術の戦列歩兵、『帝国』のコピー生産ライフルにユーオソキ伝統の散兵、高価なライフルを揃えられない王立陸軍はこの二つのミックスに虎の子の砲兵と騎兵を組み合わせていた。

ドラグーン飛竜騎兵は、400年の平和でほとんどが高速運送業へと転向したため再建の真っ最中だった。

「40年前のパーパルディアレベルの軍制ですね。脅威とはならないでしょう。」

乗ってきたトラックの荷台に括り付けられた、濃紺とグレーで塗装された武骨なロボットのような兵器と生身の兵士の使用を想定しない巨大なアサルトライフル…、58式自動甲冑（甲）と55式対自動甲冑重小銃をゆかりはコツコツと叩いた。

ラヴァーナルの遺跡で発見された魔導アーマーを仮想敵にした国防軍制式自動甲冑は、複合装甲と人工筋肉で小銃弾への十分な防御力と重機関銃を単独で携行できる補助筋力を歩兵に提供する。

対自動甲冑重小銃の12.7x99mm弾は、発達著しいボディアーマを余裕で貫通する威力を持ち、仮想敵のラヴァーナルやミリシアルの魔導障壁にもアルミニウム被覆徹甲弾頭が用意されている。

魔導強化前提の装甲材は展開魔素を無効化すれば脆い。ラヴァーナルは複合装甲の技術も保有しているが、発掘された兵器の装甲の多くは鋼板や魔素をよく通す金属に装甲魔術回路を刻む安上がりな方式だったため、『アルミ軽で魔素散らして物理でブチ抜け』防衛装備庁はこの結論を出した。

「少尉マスター、そろそろ出番です。」

「はいよ、重甲冑は久しぶりだな、普段は軽甲冑メインだし。」

迷彩柄の戦闘服姿の少尉は、甲タイプと呼ばれる重装自動甲冑を纏い、うわ重てえ、とこぼしながら重小銃を担ぎ上げた。情報軍の自動甲冑（甲）は高機動の乙タイプが主力で室

内戦に特化していた。なかでも少尉は軍刀とカスタム拳銃を組み合わせた近接戦闘を得意としている。

王立陸軍高官に外務省の担当が少尉たちを紹介する。

「日本国防軍第8自律普通科連隊です。えー国防軍では人工筋肉：機械によって、身の兵士を優に越える力と防御力を実現しています。」

それを証明するように少尉は50口径重小銃をマーチングのカラーガードめいて軽々と投げ上げる。巨大な銃を空中で回す鉄の兵士を目の当たりにした高官たちの間に軽くどよめきが走った。

「二ホンの兵士は、全てあの怪力鎧を装備しているのか？」

質問にはゆかりが引き継いで答える。

「人間の兵士はそうです。さて、次は数の上での主力を紹介しましょう。」

人間の兵士という括りに違和感を感じる高官に構わず、ゆかりが呼んだのは自動甲冑を細身にしたような人型兵器、58式自律化戦闘人形だった。

「我が国の主力歩兵、自律化戦闘人形は人間の装備をそのまま扱うことができます。機械の兵士は兵站の負担も少なく、増産、補充も容易、そして人間と変わらない戦闘能力を有しています。」

「しかし、所詮はカラクリ仕掛けだろうか？」

「いえ、自律思考を可能とする高度な人工知能と戦術ネットワークの連携は、従来の人間を凌駕します。」

謎翻訳は軍の高官に人工知能を人造の精霊と訳した。そんなものが実在するのかと、懐疑的な声を挙げた彼にゆかりは続ける。

「私です。」

は？と間拔けな反応をする高官に対して彼女は淡々と、

「皆さんの目の前に人工知能を搭載した兵器があります。私はVOICEROID、クラキ理論のニューロン発火現象を再現した人造人間です。」

謎翻訳はニューロン発火現象を『魂』と訳した。魔素を貯める器官を持たず、魔力に乏しい地球人が唯一微量の魔力を宿す臓器、脳。建物サイズの検出器でようやく確認されるほどの微量の魔素が人間の意思決定に深く関わりと発見したのは、情報軍の人工知能開発グループだった。

この基礎となるクラキ理論はまず、国防軍の対弾道弾広域即応防空AIに応用され、後には普通名詞化して、VOICEROIDシリーズと総称される知的生命体を生み出した。理論が公開された後、それに留まらず派生した人工知能は数多い。

少子高齢化による労働力不足を補う政府の人口調整プログラムは、彼らに人権を付与し人間の仕事を奪わない範囲内で代替した。無論、反対運動や差別もあつたが政府と情

報軍が全力で合法違法、ハードソフトを問わない情報統制と世論操作で容赦なく捻じ伏せ、叩き潰した。無垢な日本国民は何も知らない。

「さて、実演しましょう。分隊整列、構え、単射撃で。」

分隊ネットワークで同期されているため、わざわざ声に出す必要はないが、自然種の人間との連携のため隠密時を除き発声での指揮が推奨されている。タタン、とコンマ秒単位でずらされた統制射撃が100メートル先の的を撃ち抜く。

「続いて連射、撃て。」

パパパパッ、とフルオート射撃がされると、的は碎け散る。

「我々はこのような自動射撃が可能な銃を全兵士が持っています。」

高官たちは自律化戦闘人形用と生身兼用のアサルトライフルをゆかりから手渡されると人工知能のことを忘れ、我先にと競うように代わる代わる回して構造を理解しようとした。やがて諦めたのか銃を返すと、

「さっぱり分かん、アレも連射できるのか?」

と少尉の重小銃を指した。もちろん、と答えたゆかりは少尉に合図する。

「生身の相手は想定していませんが、問題ありません。」

重苦しい銃声とともにフルオートで発射された12.7x99mm弾の群れは、粉碎された的を木屑に変えて後ろの盛り土を削り飛ばした。

「このように相手を遮蔽物ごと撃ち抜くことを目的としています。火力の差は理解頂けましたか？」

ああ、とその威力を目の当たりにした高官は上ずった声を漏らす。

「さて、今回ご紹介したいのはこの一丁、ロングセラー小銃『ガエタンM1640』です。この銃は装弾数5発のボルトアクション式後装ライフル、雷管式前装ライフルと比べて圧倒的な精度と速射性能をお約束します。」

ゆかりは通販番組のMCのように今回の目的、輸出用小銃の紹介に移った。日本勢力圏の軍隊では小火器の自動化はとつくに終わっている。余剰となった旧式銃を買い上げた日本政府は、ユーオソキに再び売りつけようとしていた。

「準備ができたようです。」

150mほど先の横で大きくブンブンと手を振る少尉を見たゆかりは、木製ストックのムー製ライフルを構えた。国防軍制式小銃のような照準用ガンカメラも接続用LANポートもない、アイアンサイトのみの旧式銃だがARレンズのFCSを使えば問題は無い。

パアン、パアンと一発ごとにボルトを引く動作は自動火器に慣れた国防軍将兵にはまどろっこしく感じるが、撃つごとに杖で火薬と弾丸を詰める前装式マスケットとは段違いの速射性に陸軍高官は羨望の眼差しを向けた。

「この銃は、金属薬莢式の7.62x51mm弾……先ほどの戦闘人形のライフルと共通のものを使用し、紙製薬莢使用銃よりもはるかに耐候性が高く扱いが簡単になります——。試し撃ちしたい方はいますか？」

実包を一つ取り出して解説し、問いかけると、我も我もと高官たちは声を上げた。一通り試射を終えると少尉が的の弾道ゼラチンを持ってくる。質問と議論に夢中な高官に、150mを10秒ほどで走ってきたことに気付く者はいなかった。

ニツコリと営業スマイルを浮かべたゆかりと少尉は、輸出用装備のカatalogと見本のガエタンM1640、技術誇示用に戦闘人形用の43式小銃を二丁ずつと実包を贈ると、最後に装輪装甲戦闘車を全力で走らせ、機関砲の空砲を撃ち、ユーオソキ王立陸軍高官に十分すぎるインパクトを与え帰った。

4人目

その日の月読少佐の姿は、公使館応接室にあった。そして、扇風機の小さな駆動音と庭の蟬の声のみが聞こえる室内にはもう一人。少佐と向かい合ってソファに座るのは、まだ幼さの残る少年。少佐とキャビネットの上の『むさし』の模型をチラチラと交互に見る彼は『ジャン・リユンヌ・マルソー』、ユーオソキ河都の小貴族次男だった。

「気になるか？」

沈黙を破ったのは少佐、ジャン少年の履歴書から目を上げるとそれをテーブルに置き、彼女の部下が組み立てた1/350『日本海軍火力投射護衛艦^{戦艦} むさし』を丁寧撫でる。

「我が国に4隻しかない世界最高の戦艦だ。君も見たか？」

ええ、凄い軍艦ですね。と応えつつ少年は来航当時のことを思い出していた。——あのときは大騒ぎだったな、父の話にあった『帝国』艦隊の河都来航もこれくらいインパクトがあったのかもしれない。戦が始まるという噂で武具屋から弓、槍、銃、鎧が消えた話を冗談だと聞き流していたが、まさか再び同じことが起こるとは思わなかったな。

実際、河都王府内部には激震が走っていた。星央列強とは以前から細々と交易があったため、帝国艦隊の来訪はある程度事前情報があったが、日本とのファーストコンタクトは本当に突然だった。河都湾台場の海岸砲には弾が込められていたが、待機の命を守った兵は褒められるべきだろう。

「突然軍艦で押し掛けたことは悪いと思っている。だが、必要だったことだ、以前痛い目に遭っているものでな。」

百聞は一見にしかず、映像や紙の資料よりも動く軍艦はその国の国力を雄弁に語る。

もし、パールディアに外交官が護衛艦で渡っていたら、もし、先進リーカ国会議出席時に護衛隊群を付けていたら、日本人観光客は死なず、巡視船『しきしま』を失うこともなかったかもしれない。だが全てはifだ、やり直しはできない。

政府と情報軍前身組織は戦争の早期解決と予防に力を尽くした。誰がカイオスに別冊宝大陸を渡したか？、誰がグラ・バルカス帝国情報部に日本の防衛白書を届けたか？そして誰がミリシアルに日本の核兵器保有と大陸間弾道弾の存在をリークしたか？

それは日本情報軍前身組織、新世界国家の情報収集能力の低さに呆れ果てた政府と前身組織は、広報活動と並行して敵対国家の諜報員の手伝いまでしていた。

『アレが世界連合軍司令部設立の役に立った』と評するものもある。親日派の前に知日派のシンパを相手国に求めた。腹の中ではどうだろうと、まずは握手をしてくれるこ

とを相手を求め、拳を振り上げさせない工作に苦心した。防諜と意図的な情報流出、右手と左手で相反する行為を前身組織と情報軍は行つてきた。

この少年の面接もその一環、現地住民を雇うことで少しでも日本のことを知る人間を増やす為のものだった。恐れられず、侮られず。転移後40年の歳月はこのバランスを鍛えさせた。

「まあ過去の話だ、この国には関係ない。」

—— 一体何があつたんだ？ ジャン少年の思いを無視して続ける。

「履歴書は読ませてもらった。正直、志望動機などはどうでもいい。我々は仕事さえこなしてくれば文句は言わない、君は語学を専門に学んでいたそうだな？ ここで翻訳を手伝つてほしい。」

「どうだ？ とほぼ同じ高さの目線を合わせた少佐に彼は答える。

「よ、よろしくお願ひします。」

「(ちらいそ)。」

少佐が差し出した手を少年は握り返した。後にユーオソキ近代化を裏から推し進める彼の運命が決まった瞬間だった。

就労条件についての質問をいくつか交わすと、彼は契約書にサインした。就業規則や日本の資料を受け取り、退室しようとする彼を少佐は呼び止める。

「ああそうだ少年、これを渡しておこう。」

忘れるところだった、と言って少佐が出したのは個人用情報端末とAR機能付きの眼鏡。黒いフレームのそれを掛けるよう促すと、ある名前を呼ぶ。

「サポートガイド、『結月シズ』起動。」

『初めまして、個人用端末サポートAI結月シズです。ユーザーを登録してください。』

『起動中』の文字の後、光のグラフィックとともに少年のARグラスに映ったのは同年代か少し年下の少女。ページュのカーディガンをセーラー服の上に羽織った彼女はゆかりによく似ていた。

驚いた彼がグラスを外すと、彼女の姿は消えた。少佐は悪戯っぽい笑みをうかべ教える。

「ふふつ、幻だ、実体はない。その板とメガネの使い方方を教える精霊だと思え。」

クラキニユニロン発火反応こそないものの、クラキ理論を用いたAIは翻訳現象が適用される。倫理的問題から公的機関専用のサポートAIだった。

「ユーザ登録、登録名『ジャン・リユンヌ・マルソー』、網膜認証登録、運用モード『お友だち』、セキュリティクリアランスLevel 1-Bを付与、上位権限者『×大尉』、初期設定者『月読アイ少佐』以上。復唱不要。」

×

『初期設定完了。ジャンくんよろしくね?』

「あつ、はいシズさんよろしくお願いします。」

早口でAIの初期設定を終えた少佐に、魔法助手の肩書きを持つ彼は、——知らない魔術だ、どこの流派だろう?と眩く。

ニイツと口角を上げた少佐は、——科学だよ。我が国に魔術はほとんど存在しないと、答えた。

亡国の罪人

パーパルディア皇国首都エストシラント、その郊外の海を望む霊園に一人の老婦人がいた。彼女の名は『エルト・レイヴン』、外務局局長を務めたこともある戦後パーパルディアの功労者の一人だった。

彼女は老齢の身体に厭わず、毎週ある人物の墓参りに来ていた。

霊園の隅にポツンとある墓の周囲にはゴミが散らばり、墓碑にはペンキが撒かれていた。エルトはいつものこと、とでもいった様子でゴミを持参した袋に詰め、洗剤を含ませたスポンジで墓碑を磨く。

黒いペンキの薄まった墓碑には、こう短く刻まれている

『慈悲を遣えし女、ここに眠る レミール・マートル 16^x』

彼女に家名はない。日パ戦争の開戦を招き、パーパルディアを列強の地位から転落させた大罪人として皇族の籍を剥奪されたのだ。

かつて、皇国旧第一外務局ではエルトの上司にあたる人物だった。日本人観光客203名の殺害命令を下し、日本を激怒させた彼女は戦後、身柄を彼の国に引き渡され長い裁判の後死刑に処された。

「この国も随分と変わってしまいました。あなたと私のせいです。彼の国を見誤ってしまつた。、五十七万六千九百二人。彼らの命は私たちが奪つたのです。」

彼女が掃除の手を止めて見つめる先、遠く、皇城。パラディス城とそれを見下ろすようにそびえる高層ビル群は、パーパルディアと日本の力関係を示すようだった。

第三文明圏最大の列強国は、その属領を全て失い、一時はかつての共和国時代まで国土は後退した。戦争ののち第三文明圏の盟主の座は日本へと移り、パーパルディアは地域大国へと転落。

蛮族、蛮族と蔑んでいた旧属領や文明圏外国からの復興支援と敗戦の衝撃は、皇国民のプライドを粉々に打ち砕いた。

支援を引き出す為にエルトやカイオスを始めとする新政権メンバーがどれほどの恥辱を受けたか、講和直後の混乱期に何度苦渋の決断を迫られたか、立場の逆転した相手から地面に頭を擦り付けかき集めた食糧、日本軍上陸のデマで暴徒と化す民衆、停戦の連絡を無視して進軍する73ヶ国連合軍を相手に、律儀に停戦を守り壊滅した属領統治軍の部隊もあつた。

旧第一外務局の上層部、レミールなどたったの数人で決められた日本への対応、その結果がああ戦争だった。

列強としての驕り、第三文明圏の覇者という慢心はその目を曇らせ、致命的な過ちを

犯した。

「『情報は上に行くほど簡素化され、都合のいいように解釈される。』だが、私たちは生の情報を自ら欺瞞だと言って切り捨ててしまった。」

進駐してきた自衛隊日本軍の、とある連絡将校の言葉を呟く。

今でも、日本人殺害事件の経緯を調査したときの開戦時のあまりにもお粗末な情報収集、解析能力を目の当たりにした将校からの侮蔑的な眼差しが忘れられない。

彼に『ゴミの掃除も満足にできんのか?』と抗戦派貴族の刎ねられた首を会議室で投げ出された際は、卒倒しかけた。

それでも持ち堪えたエルトが辛うじて絞り出した『や、野蛮人め…』という言葉に彼はこう応えた。

『何を言っている? 正当防衛だ。貴様ら蛮族と一緒にするな。我が国の国民は無抵抗で殺された。』

心底不思議そうな顔で、道で挨拶されたら返すだろうか? 程度の調子で言った。——命の扱いが軽すぎる。抗議しようと思つた瞬間、ふと彼女は我に返つた。——皇国が散々してきたことでは無いか。同席している第三外務局と臣民統治機構の幹部は、顔面蒼白で小刻みに震えていた。

彼らが、今まで文明圏外国や属領にどんな仕打ちをしてきたか容易に想像できる様子

だった。

「因果応報、洗いざらい聴取が終わったら処刑されるものだと思っていました。」

しかし彼女は生き残った。エルトの外交手腕を買った暫定国家元首のカイオスの必死の尽力で、新外務局に留まることを許されたのだ。

『生きろ、恥を晒せ、新外務局ここで役目を果たすことがお前の皇国への罪滅ぼしだ。』自裁が頭をよぎったときカイオスに掛けられた言葉だ。似たような言葉は件の将校にも言われた。

それからパーパルディア新政府が軌道に乗るまで、身を粉にして働いた。もちろん道のりは平坦ではなかった、売国奴と後ろ指を指されても気丈に振る舞い、日本や旧属領を相手に祖国のために渡り合った。

そのためにレミールにすべての責任を負わせ、新政府と国民の団結のための生贄とした。——私が皇族だからと甘やかしたばかりに、皇族のすることと、傍観したばかりに。後悔と自責の念は、数十年が過ぎても薄まらなかつた。

「殿下、もういいでしょう、私の役目は終わったのです。」

取り出したのは、戦後混乱期にカイオスから護身用に、と渡されたフリントロック式ピストル。規制の厳しい昨今、エルトが持つ中では楽にそして確実に死ねる道具だった。

「やっと、やっとそちらへ向かうことができます…。」

ター——ン

乾いた銃声が木霊する、目をつぶっていたエルトは驚いて銃を取り落としてしまった。——今の音は？

「動くな！ ゆっくりとこちらを向け！」

言われたとおりに振り返ると、そこには38口径リヴォルヴァーを空に向ける^{E. S. P. D.}エストシラント市警の若い警官がいた。レミールの墓が荒らされることを受けて、市警は日に数度パトロールをしていたのだ。そこで銃を持った不審者を見つけた警官は威嚇射撃をした。

初めて銃を抜いたのだろう、震える手で無線機を握り応援を呼ぶ警官を横目に、頬に涙を伝わせ彼女は呟く、

「まだ、まだ私に生きろと言うのですか…。」

彼女がなぜ涙を流すのか、戦後世代で元属領の州出身の若い警官には解らない。

日本情報軍活動録
file. 2016—パールパーティ

ア

朝の始業時間の前、少尉は湯気の立つマグカップを片手に情報端末タップレットを見ていた。その画面には情報軍データベースが表示されている。階級には不釣り合いなセキュリティクリアランスLevelを持つ彼が興味を示したのは『エルト・レイヴン自殺未遂』の報告書、気になった彼は生体認証とパスワードを入力して詳細を閲覧する。

「懐かしいなあ、今になってもまだ引きずるか。ちよつと追い詰め過ぎたかねえ。」

そう小さく漏らしてお茶を啜る彼に、あまり褒められた行為ではないが画面を覗き見たゆかりが——お知り合いですか？と聞く、

「いや、何でもない。今は関係ない、ただの昔の出来事さ。」



西暦2016年、中央暦1640年の9月、日本の空爆で瓦礫の山と化したパールディアの皇都陸軍基地、復旧作業で更地程度にまで片付けられたその一角に陸自のチヌークが着陸した。

「これはまあ、酷いな。」

未だに、物が焼ける臭いと死臭が漂うような基地に降り立ったのは三等陸尉の階級章をつけた青年、飛ばされそうな制帽を抑えて空を見上げると護衛の戦闘ヘリが忙しく旋回を続けている。

「831の、急ぐぞ。遅刻する奴は嫌いだ。」

「ノンノン、ここではボクは『ネモ・ナナシー』いいね？ 878支部長さん。」

「花谷と呼べ。その名前、どうにかならなかったのか？ お前はいつもお遊びがすぎる。」

奇妙なことに831支部長と呼ばれた彼の制服には階級章と『捻茂 七志』の名札以外には陸上総隊の部隊章、職種章の位置にはアルファベット2字が凶案化されたバッチを着けているだけだった。

それは878支部長と呼ばれた彼女も同じ、二人は迎えの軽装甲機動車に乗ると基地を後にした。

「さて、あちらさんの様子はどうか？」

運転手の若い女性自衛官に近況を聞く、この自衛官も捻茂三尉と同じバッチを着けていた。

「意外とスムーズに占領は進んでいます。BP-3Cの空爆を目の当たりにしましたからね。」

かつて、地球のアメリカ軍が保有していたB—29と同等の搭載量を誇る爆撃機70余機による戦略爆撃は、パーパルディアの戦意を喪失させるには十分なものだった。

「結構、結構、適度な恐怖は流れる血を少なくする。カイオス氏も頑張ってくれたかな。」

「私たちも、だろうがバカめ。」

雑談をするうち三人の車はいつの間にか、もう一台の軽装甲機動車が先導する黒塗りのバンの群れの後ろにピッタリと付いていた。

無人銃架が周囲を睨む装甲車で前後を挟まれたバンの車列はやがて目的地、パーパルディア皇国第一外務局庁舎前に乗り入れた。

装甲車を降りた捻茂三尉と花谷三尉は、拳銃を引き抜き正面玄関へ向かう。当然、守衛に止められるが、

「退け！日本政府の方から強制捜査に来た、邪魔だ！退けや！」

拳銃片手に押し通ると黒スーツの少年少女といつてもいい年頃の部下を引き連れて、カイオスから紹介された元局員の案内で目的の場所へと向かう。

「はいはい、そのままそのまま、皆さん動かない動かないで。」

銃を持った闖入者に驚く外務局員に構わず、三尉は——かかれ。と命じた。三尉と同じバッチを着けた黒スーツの群れは手当たり次第書類や資料を段ボール箱に入れ始め

る。

「な、何をする貴様ら。」

どかん。

「黙れ！日本政府の方の者だ。『フェン王国における日本人観光客殺害事件』の捜査にきた。」

令状を見せつつ大型拳銃を撃ったのは、花谷三尉。威嚇射撃で天井に50口径の穴をあけた彼女は続ける。

「全員壁際に並べ！一切机の上のものに手を触れるな！」

どかん。

穴がひとつ増えた。

「聞こえなかったか？触るな、と言ったはずだ馬鹿者。早くしろ。」

慌てて壁際に寄った局員を見まわし、引き金に指を掛けたままの銃を片手に告げる。

「日本を担当した者、前へ出る。」

少しのざわめきの後、真っ青な顔の何人かが押し出されるように前へ出た。

「よろしい、局長はどこだ？」

「私です。」

サブマシンガンを携えた陸自隊員に左右を挟まれ、現れたのは黒髪の女性。彼女が

パーパルディア皇国第一外務局局长『エルト・レイヴン』だった。

「貴様か、日本政府及び警視庁の代行で来た。日本国陸上自衛隊本陸から派遣された、花谷と捻茂だ。要件は分かっているな？」

涼しい顔で答えるエルトに同行を促すと、部下に押収作業と下つ端の尋問を任せ、エルトとレミールの部屋、局長室へ案内させる。

「随分と手荒な人たちですね。外交官は穏やかでしたが？」

「コレもそつちの流儀に合わせただけだ。暴力は使い方が大切だからな、どこかの莫迦とは違う。」

銃をホルスターに戻した二人は、エルトの尋問を始める。

「たかが平民、200人程度で大げさですね。」

「なるほど。」

捻茂三尉は『森の人』と呼ぶ拳銃を抜くと、茶を持ってきた局員を射殺、22口径の威力に満足しなかったのか、マガジン分の弾全てを連射した。

「たかがパーパルディア人だ。」

花谷三尉は——50口径なら一発だぞ、とアドバイスをして、死んだ彼が持ってきたカップを口につけながら、何の感慨もなく、

「大丈夫だ。そいつは明日、馬に撥ねられて死ぬ。そして捻茂は銃の暴発の始末書を

書く。それだけだ。」

突然の蛮行に——何故、と声を上げるエルトに花谷はゆっくりと答える。

「何故、か。教えてやろう、お前らがまともに状況を判断できないバカだからだ。何故フェンで日本人が死んだか、過去のお前らがバカだからだ。何故、ここでコイツが死んだか、今のお前がバカだからだ。口の利き方に気をつける、貴様はこの国の外交代表だろう？一言で万単位の間人が死ぬぞ。」

「協定を無視するというのですか。これは後ほど然るべきルートを通して、抗議させていただきます。」

エルトも外務官僚、結ばれた条約などはほとんど暗記している。日パ間で結ばれた講和、そこには虐待行為を禁じる協定も含まれていた。

「協定？日本政府が勝手に取り決めた紙切れのことか。あんなものは我々には関係ない。」

国家公務員
陸自幹部の制服に身を包んだ花谷は、そう吐き捨てた。二人の、ただの軍人には持ちえぬ殺気と妖気に当てられたエルトはそれでも尋ねる。

「あ、あなた達は一体……？」

「自己紹介は済ませただろう。だが、これだけは言っておく。貴様らは我々を怒らせた。」

能面のような表情を貼り付けた二人は、エルトとレミールの机の中身を全て撮影したのち段ボール箱に詰めると、また明日来ると言つて第一外務局を後にした。

空になった机と死体が床に転がる執務室に、一人残されたエルトは思案に耽つていた。——一体何を敵に回した？ 政府の名を騙つて行動？ 彼の国の背後に何が潜んでい
る？ 亡国の罪人レミールは一体何をこの国に招いた？

未知は恐怖を増幅させる。列強パーパルディア皇国を叩き潰した日本国、その奥で蠢く存在にエルトは、皇国高官としてはカイオスに次いで触れてしまった。彼女の受難は戦後に始まる。

石畳の落ち葉を踏みつけ走る装甲車内には、制帽を弄ぶ捻茂とネクタイを緩める花谷の二人。

「コスプレはいつでも緊張する、お前にしては穩便に済ませたな捻茂。」

「おそらくあの局長は指示に従つていただけだ。中間管理職にすぎん、だがレミールは政府管理下、迂闊に触れんからな、手元のカードは絞れるだけ絞るさ。」

「直属の部下を失つた元凶の前で、よく平静を保てるな。」

「元より我々は員数外、覚悟の上だ、だが213名の代償は払つてもらおう。」

『フェン王国における日本人観光客殺害事件』での日本政府公式発表の犠牲者数は203名、だが彼は10人多く数えた。その10人は日本国籍を有していなかった、のち

に『日本情報軍』と称される政府黙認の治安維持組織、捻茂と花谷、若い自衛官と黒スーツ、そしてフェンで散った10人の胸に共通して輝く、小指の爪ほどの大きさのアルファベット2字が図案化されたバッチが構成員の証だった。

「『歴代最強』を動かせばこんなことにならなかつただろうに、上の認識が甘かつたな。」

「彼女は首都鎮護の切り札、簡単には動かせない。」

——全ての人間が銃弾を回避できるはずがないからな。そして生の現場にはどうしても人間がいる。ため息をついた彼はそう呟くと目を閉じた。ニシキギシステムとクラキニューロン発火反応は、2010年代には理論すらまだ無い。

設定資料と備忘録

登場人物

《日本情報軍》

・ 結月ゆかり ゆづきゆかり 「少尉、お話しがあります。」
マスター

一人称 『私』

from 少尉↓ゆかりさん 月読↓結月 あかり↓ゆかりさん 茜↓曹長さん

所属：日本情報軍（ユーオソキ駐在武官）

階級：曹長

・ 少尉 しょうい 「待ってくれゆかりさん!？」

一人称 『ボク』

from ゆかり↓少尉 マスター 月読↓大尉 あかり↓大尉（期間限定）さん、茜↓大尉（仮）

さん

所属：情報軍前身組織↓日本情報軍（ユーオソキ駐在武官）

階級…少尉↓大尉待遇少尉

・月読アイつくとよみあい 「バカどもめ。」

一人称 『私』

from ゆかり↓月読少佐 あかり↓少佐さん 茜↓少佐ちゃん

所属…日本情報軍（ユーオソキ駐在武官）

階級…少佐

《日本国防衛省》

・RTDシステムreal time defense 「全ては1億2000万のために。」

一人称 『???』

from ゆかり↓RDさん 少尉↓RDさん 月読↓???

所属…日本国防衛省

階級…対弾道弾広域即応防空AI

《日本国外務省》

・継星あかりきずなあかり 「ゆかりさくん。」

一人称 『私』

from ゆかり↓あかりさん 少尉↓継星さん 月読↓継星くん 茜↓あかり

ちゃん

所属：日本国外務省在ユーオソキ公使館

階級：n等書記官

・ことのはあかね琴葉茜 「仲ええな〜。」

一人称 『ウチ』

from ゆかり↓茜さん 少尉↓琴葉さん 月読↓琴葉くん あかり↓茜ちゃん

所属：日本国外務省在ユーオソキ公使館

階級：公館料理人

《日本国政府》

・???? 「消さねばならん…、地球の亡霊だ…。」

一人称 『???』

from 社長↓ピー

所属：日本国政府

階級：???
???

《大東洋統合警備保障》

・???? 「遺してやるさ、存在の証明をな。」

一人称 『私』

from ゆかり↓??? 少尉↓支部長 月読↓??? 部下↓姫、お嬢、社長

所属：情報軍前身組織↓大東洋統合警備保障

階級：代表取締役

・??? 「弾の飛び出る槍ですぜ、こりゃ。」

一人称 『オレ』

f r o m 社長↓お前

所属：陸上自衛隊↓大東洋統合警備保障

階級：士官級

《M大学ラヴアーナル研究室》

・宇井野・アリアル 「キミとは若干キヤラ一人称が被らないかい？少尉。」

一人称 『ボク』

f r o m ゆかり↓アリアルさん 少尉↓アリアルホンさん ミリアル↓アライ姉

所属：M大学ラヴアーナル研究室

階級：無

・宇井野・ミリアル 「扱いに困ったら、着払いでこっちに送ってください。」

一人称 『私』

f r o m アリアル↓ミライ

所属：M大学ラヴアーナル研究室

階級…無

《『帝国』大西海総督府》

・ヘルムート・フォン・ベルガー 「最善を尽くすのみ。」

一人称 『私』

from 総督↓ベルガー提督 部下↓提督

所属…『帝国』大西海総督府海軍

階級…大西海艦隊提督

・大西海総督 「大西海は帝国の生命線だぞ！」

一人称 『儂』

from 提督↓総督

所属…『帝国』大西海総督府

階級…総督

《サンユーオソキ双王国》

・ジャン・マルソー 「ニホンの方ですか？」

一人称 『オレor僕』

from ゆかり↓ジャンくん 少尉↓ジャンくん 月読↓少年

所属↓日本公館職員

階級…河都貴族次男

《大セーカ国》

《クイラ王国》

《クワトイネ公国》

《パーパルディア皇国》

《神聖ミリシアル帝国》

登場国家と組織、用語

《日本国》（ver. 206×年） 第三文明圏 列強

国旗 白地に赤い日の丸

・日本政府防衛省

・情報国防軍（日本情報軍）：国内外の情報収集、分析、対応をほとんど引き受ける。元々、非政府組織を源流とする。政府系情報機関とサイバー戦部隊も取り込み、巨大組織と化している。

・陸上国防軍（陸軍）

・海上国防軍（海軍）

・航空宇宙国防軍（空軍、宙軍）

・組織：明治政府樹立以前から独自に治安の維持を担っていた組織。転移後は解体、政府の傘下に組み込まれる。（実はリコリコのDA、例の二人は引退してアルタラスで喫茶店でもやってるはず。）

・大東洋統合警備保障：組織の解体と国防軍成立で、古巣を離れた元リコリス、リリ

ベル、自衛官による民間軍事会社^P^M^C。情報軍監視対象。

《サンユーオソキ双王国》 大西海火竜列島に位置する。

国旗 夕日を背に交差する杖と剣

- ・ 『河都』 ……日本使節団が上陸した場所。河都成立以来はこちらが事実上の首都。
- ・ 『教都』 ……河都の東に位置する。河都成立以前の首都。

《帝国》 星央列強

国旗 黒、銀、赤の三色旗^{トリコロール}

- ・ 大西海総督府 ……大西海の帝国植民地とユーオソキを管轄する。
- ・ 陸軍 ……ユーオソキでは主に教都に駐留
- ・ 海軍 ……ユーオソキでは主に河都に駐留

《大セーカ国》 大西海沿岸最大国

国旗 黄金の雲海を羽ばたく竜

- ・ 皇帝派（親帝国派）
- ・ 皇帝派（反帝国派）
- ・ 革命軍いろいろ（各星央列強派）

・その他（地方軍閥から個人まで）

《クワトイネ公国》 第三文明圏

国旗 緑地に祈る豊穡の女神

《クイラ王国》 第三文明圏

国旗 ツルハシを掴む鷲

・大東洋統合警備保障の本拠地

《神聖ミリシアル帝国》 第一文明圏

国旗 金環に放射状の蒼の魔力



《VOICEROID》：情報軍技研が開発した、人類の次の知的生命体。科学と魔導の産物、クラキルニューロン発火反応の『魂』^{コア}をその身に宿す。

《義体》：VOICEROID用の身体。用途も民生用から軍用まで、価格も軽自動車から豪邸並みまで様々。乗り換えることは少ない。

《自律化戦闘人形》：防衛力の強化と省人化の両立のため開発されたアンドロイド兵。VOICEROIDの技術が流用されている。

《遠隔戦闘人形》：上記の前身。通信妨害を受けると無力化される弱点から廃れた。

《自動甲冑》：国防軍歩兵の標準装備。重機関銃を振り回し、一部機種は射線を認識して

銃弾を回避する機動性を持つ。

《やまと型火力投射護衛艦》：日本海軍の主力艦。同型艦『CCG-900 やまと』『CCG-901 むさし』『CCG-902 しなの』『CCG-903 きい』建造時期が違いため細かな差異がある。

《ヴェステン》：『帝国』海軍の最新鋭魔導装甲艦。帯魔鋼の装甲と28cm魔導力ノン砲を備える。